

グローブ画「ペスタロッターとシュタンツの孤児」の複製と伝播について

—あるいは、教育運動における視覚メディアの役割—

丸山 恭司

(2005年9月30日受理)

On the Reproduction and Diffusion of Grob's "Pestalozzi and Orphans in Stans":
Or the Role of Visual Media in Educational Movement

Yasushi Maruyama

Konrad Grob's painting, "Pestalozzi and Orphans in Stans," has been accepted in Japan as a typical visual image of Pestalozzi. This paper illustrates how this painting came to and spread out there: Chronologically, Grob painted in 1879 and Basel Public Museum purchased it in the same year; in Munich Shigenao Konishi, a Professor of Kyoto Imperial University, obtained a smaller black-and-white reproduction of it, which was used to make various copies after his return in 1905; In Basel Arata Osada, a Professor of Hiroshima High Normal School, brought with him in 1929 six pieces of colored reproduction made in Vienna in 1927, the centennial anniversary of Pestalozzi's death; and Kuniyoshi Obara, an educator who had his own publisher, made and sold three different sizes of reproductions by using the Viennese colored version in 1930. The process of popularizing the picture is that of apotheosizing Pestalozzi in Japan. The educators accepted Pestalozzi as their ideal with the icon of "Pestalozzi and Orphans in Stans."

Key words: Konrad Grob, Pestalozzi, Shigenao Konishi, Arata Osada, Kuniyoshi Obara, Visual Media, Educational Movement

キーワード：コンラート・グローブ、ペスタロッター、小西重直、長田新、小原國芳、視覚メディア、教育運動

はじめに

広島大学のペスタロッター資料室には三枚の絵画が掛けられている。奥から、ホツク画「ペスタロッター肖像画」、バウムベルガー画「闘士ペスタロッター」、そしてグローブ画「ペスタロッターとシュタンツの孤児」¹⁾と並ぶ。「肖像画」はシェーナーによる肖像画をホツクが模写した油絵であり、いまだ落ち着いた輝きを放っている。この絵は1941年にスイス政府よりそのペスタロッター研究の業績を讃えて長田新へと贈られた由緒正しい作品であることが知られている。また、バウムベルガーによる「闘士」も1960年に同じくスイス政府より長田に贈られた石版画である。毎年広島大

学で開かれるペスタロッター教育賞受賞式にはこの「闘士」が正面に飾られ、今日なおその存在感は健在である。このなかにあつて、「シュタンツの孤児」は立派な額縁に入れられてはいるけれども失色著しい印刷複製でしかない。とはいえ、この多色刷もまた由緒ある複製画である。1927年ペスタロッター没後百年を記念してウィーンで印刷され、長田がバーゼルで購入し日本に持ち帰った複製画なのである。本稿は、当ペスタロッター資料室が所蔵するこの複製画の移入とさなる複製・伝播に関する調査報告である。

この印刷複製画が日本に移入された経緯については、松田義哲を中心に広島大学教育哲学研究室によってまとめられたペスタロッター研究所蔵文献目録に

若干の解説がある²⁾。また、岡谷英明も広島高等師範学校ペスタロッチャー研究会による複製画の伝播および日本のペスタロッチャー運動におけるその意義について言及している³⁾。ただ、それぞれの研究が参照した資料は限定的であり、「シュタンツの孤児」の複製・伝播の意義を国際レベルで吟味するには断片的な叙述にとどまっていると言わざるをえない。本稿は、ウィーンおよびグラーツでの調査(2001年8月)、バーゼルでの調査(2002年8月)、玉川学園での調査(2002年9月および2004年8月)、そしてチューリッヒでの調査(2004年9月)をもとに、複製と伝播に関するより詳細な情報を提供することを課題とする。

「シュタンツの孤児」の複製と伝播に関する重要事項を年代順に示すと次のようになる。

- 1879年 K. グローブによる原画完成
- 1905年 小西重直による日本への移入
- 1927年 ウィーン版複製画の製作・販売
- 1929年 長田新による日本への移入
- 1930年 玉川学園版複製画の製作・販売

以下、これらの事項の詳細を見ていこう。



広島大学ペスタロッチャー資料室

1. K. グローブと「ペスタロッチャーとシュタンツの孤児」(1879)

原画は1879年にスイス人でミュンヘン在住の画家コンラート・グローブ(Konrad Grob)によって描かれた。

グローブは1828年にスイス北東部にあるアンデルフィンゲンで生まれている⁴⁾。農家の息子としてヴィンタートゥーア近郊のヴェルトハイムに育つが、14歳のときにアンデルフィンゲンの人たちの援助によって石版画の技術を学び、石版画工としてザンクト・ガレンやイタリアのヴェローナ、ナポリで長く過ごした。37歳になってミュンヘンに移り、当地の芸術アカデミー

に入る。五年後にはそこでランベルクのクラスに参加し、歴史的なテーマに惹かれながらも日常風俗画の手ほどきを受けた。また17世紀スペインの画家ムリヨの研究を行っている。学業を終えたグローブは瞬間に人気画家となるが、1878年パリで開かれた国際展覧会出展の歴史絵画は不評を買い、歴史画家としての評価を下げるようになった。スイスの史実や日常風俗をテーマとした作品を多く残している。1904年に肺炎にかかりミュンヘンで亡くなる。76歳であった。

「シュタンツの孤児」はこの絵が完成したのと同じ年にバーゼル公立美術館が購入している。当美術館は市民のために創設された最初の公開美術館である。この絵の購入には、資産家ビルマンによって寄付され、スイス人の作品の購入に充てるよう用途を限定されたビルマン基金が用いられた⁵⁾。また、運営委員会にはバーゼル大学で文化史を教えていたブルクハルトが入っており大きな影響力をもっていた。この絵は現在もバーゼル公立美術館が所蔵しているが、一般公開はされておらず倉庫に眠ったままとなっている。その理由を当館学芸員に尋ねたところ、この美術館が所蔵する他の作品に比べ美術史上の価値が低いいため、展示する意義はあまりないとのことであった。

なぜグローブがこの絵を描いたのかはよくわからない。確かに、スイスの歴史絵画と日常風俗画の両者の特徴をもった絵であり、グローブ自身が着想を得たモチーフであったのかもしれない。実際この絵はスイス史に関するよく売れた著作の挿絵として早くから採用されている⁶⁾。他方、バーゼル公立美術館がスイス国民の国家意識を称揚させるものとして直接スイス人画家であるグローブに依頼したことは十分にありうるといのが学芸員の推測であった。

2. 小西重直による日本への移入(1907)

京都帝国大学教授であり、成城学園顧問、玉川学園理事であった小西重直が、玉川学園発行の『学園日記』第7号(1930年2月)に「ペスタロッチャーのスタンツ孤児教育絵画物語」⁷⁾という紹介文を寄せている。「シュタンツの孤児」はまずこの小西によって日本に移入され広められたと考えられる。

小西が「シュタンツの孤児」に最初に出会ったのは1902年から1905年のライプツィヒ大学留学の間(おそらく1902年)にチューリッヒのペスタロッチャー研究所を訪れた時であった。そこで彼はこの絵が「写真の額となって居る」⁸⁾のを見つけ、「其内容が如何にもペスタロッチャーの精神や事業を如実に表はして居るので、

私は非常に引きつけられ」という。さっそく彼はこれと同じ複製画を求めてチューリッヒ市内を捜し回るのが見つかることができなかつた。その時の感慨は次のようなものであつた。「斯様な意味深い絵が、神人ペスタロッターの生れ故郷に於て、まことに冷淡に取り扱はれ、誰も此の複製さへ手に入れようとする熱もなく、此を同志に分けてやらうといふ親切心もないのであろうかと私は恨めしくもあり、腹立たしくもあり、失望して寂しくチウリツヒを去つた」のであつた。

小西は留学先のライプツィヒに戻る途中、ミュンヘンに立ち寄る。美術館を観た後、「美術写真店」に入つて好みの絵画の複製を捜した。その折りに店主に何気なく期待もせずに「シュタンツの孤児」について尋ねてみた。すると店主はいろいろと捜してくれた末に一枚の絵を差し出した。それはまさに小西が捜し求めていた絵画の一枚の写しであつた。「自分の迷子を見出した以上の喜び」であり、「身ぶるいする程うれしく、涙が出る程うれしかった」。さっそくこの複製画を手に入れて日本に持ち帰ることになる。ただ、この複製画には配色がなされておらず、またサイズも小版のものであつたようである。

なお、小西のこの紹介文には次のような記述がある。「夫れを神様の子のやうに大切に日本に持ち帰つたのであるが、それが同志の人々の共鳴を得て、今では可成広く普及されて居り、ペスタロッターの精神が芸術的にも味はれて居るのはまことに愉快なことである。」つまり、この紹介文が世に出た1930年の段階ですでに「シュタンツの孤児」は小西によって紹介され広く知られていたのである。おそらくミュンヘンで購入された複製画がさらに複製され、何らかの形で配布されたのであろう。実は、広島大学ペスタロッター資料室には、この小西の複製画を元にしたモノクロの複製画が所蔵されている。その余白には次のような解説が付せられている。「この原画は京都帝国大学教授文学博士小西重直先生が先年彼の地を巡礼されて、非常な苦心の末漸く探して来て、『神のみたまを抱く』心持で我国に持ち帰られたもので、今度これを普く頒布するやうになつたのは、博士の厚意によって、その喜びをわが国の教育を思ふ人々に分かつたとの微意によるのである。(大正十三年二月十七日 広島高等師範学校。ペスタロッター研究会)」

福島政雄もこの絵に魅了された一人であつた。1925年9月にペスタロッター遺跡巡歴の旅に出た福島は最後にバーゼルに立ち寄っている。「スタンツにおけるペスタロッターの絵はバーゼルの文部省の階上の廊下にかけてあつた。十余年来親しんで来た此の絵の原画を今眼のあたり見て、私は深い嬉しさを感じた。」⁹⁾

福島は、すでに日本で流布していた複製を通してこの絵に親しんでいた。そしてバーゼルで原画と出会つたのである。バーゼル公立美術館の記録には、1919年にこの絵をバーゼル市の教育省に貸し出したとある(ただ、いつ美術館に戻つたかは記録にはない)。1928年に美術館の倉庫で原画を確認した長田新ではなく、1925年にバーゼルを訪れた福島が原画を見た最初の日本人教育学者であつた可能性は高い。

3. ウィーン版複製画の製作・販売(1927)

本学ペスタロッター資料室に展示されているのは、このウィーン版複製画である。その印刷余白には次の記載がある。

Gemalt von Konrad Grob, München
PESTALOZZI IN STANS
Mit Genehmigung der öffentlichen Kunstsammlung in
Basel
Deutschen Verlag für Jugend und Volk, Wien I.
—Druck von Christoph Reisser's Söhne, Wien V.

この記載から、原画はグロープによって描かれたこと、バーゼル公立美術館の許可を得てウィーン第一区にある「青年と国民のためのドイツ出版社」(以下、J&V社と略す)が製作したこと、印刷はウィーン第五区にある「クリストフ・ライサーズ・ゼーネ」という印刷所(?)が請け負つたことがわかる。

当時の雑誌から二つの広告を紹介しておこう。『学校改革』と『社会主義的教育』には次のような広告文が掲載されている。

J. H. ペスタロッター百年記念祭のために、ウィーン
のJ&V社は以下の新刊を編集いたしました：
……。

シュタンツのペスタロッター。コンラート・グ
ロープによる原画の美術複製画。原画を所蔵する
バーゼル公立美術館の許可を得て四色刷にて製作さ
れたこの壁掛け用写真画は複製美術の傑作であり、
最も美しいペスタロッター絵画といえましょう。意
義ある装飾品としてこの絵をすべての学校にお勧め
いたします。(Schulreform, 6. Jahrgang, Heft 3, Leipzig-
Wien-Prag, Februar 1927, S. 120.)

J&V社(ウィーン)はペスタロッターの命日祭
のために以下の作品を刊行いたしました。

コンラート・グローブ、シュタンツ (Stanz) のペスタロッチャー、四色刷の美術複製画。一枚の大きさは66×88センチメートル。最も美しいペスタロッチャーの絵であり、見事な複製となっています。仲間内で、学校で、記念祭のときにこの絵をご利用いただくことができます。この絵は、価値ある、際立った、永続的な印象を記念祭にもたらせてくれます。価格8シリング。(Die Sozialistische Erziehung, 7. Jahrgang, Nr. 2, Wien, Februar 1927, S. 32.)

広告文にもあるように、ウィーン版は1927年のペスタロッチャー没後百年を記念して製作・販売されたものである。この年には世界各地で記念行事が行われた。ウィーンにおいても、当時の教育関係雑誌を見る限り、様々な行事が挙行されたようである¹⁰⁾。

ここで興味深いのは、今日ではほとんど忘れ去られているけれども、1920年代のウィーンが新教育のメッカと呼ばれていたことである¹¹⁾。第一次世界大戦に敗れたオーストリアは社会民主党が政権を握り、大胆な学校改革を進めた。その中心となった指導者がオットー・グレッケルであった。グレッケルは新教育の理念を学校制度の改革から浸透させようとした。間もなくオーストリア全体はキリスト教保守派によって政権を奪われるが、ウィーン市は社会民主党主導のままであり、グレッケルは引き続きウィーン市の教育政策の責任者となり改革を進めた。実際、没後百年を記念した雑誌記事にも社会改革者としてのペスタロッチャーを強調する記事が散見する。

ウィーンおよびバーゼルにおける調査では、記念事業の一環として「シュタンツの孤児」の複製画を製作するという案を誰が出したのかを明らかにすることはできなかった。長田は「教育品展覧会に陳列したウィーン市教育会」によると記述しているがその典拠も不明である¹²⁾。ただ、発売元であるJ&V社がグレッケルの学校改革を支えた出版社であったことを考えると、製作企画者がペスタロッチャーに込めた意味を推察できるように思う。

4. 長田新による日本への移入 (1929)

長田新は1928年から1929年にかけてライプツィヒ大学に留学した。滞在中、雑誌『渾沌』に「ペスタロッチャー遺跡巡り」を寄稿している。帰国後その一部に加筆を施したものが『学園日記』第八号(1930年3月)に掲載され、後に『独逸だより 再遊記』(目黒書店、1931年)に再録された。それが「グローブ筆『スタンツ

のペスタロッチャー』を訪ねて」という紀行文である¹³⁾。

長田は1928年8月にベルンを訪れる機会があった。このときすでにバーゼル公立美術館を訪問してこの絵と面する計画を立てている。ただ、彼はライプツィヒからベルンへ向かう途中バーゼルに立ち寄るが、急行列車が到着したのは午後9時半。美術館訪問にはあまりに遅い時間であった。それで美術館へはベルンからの帰りに立ち寄ることにした。しかし、結局、帰途の際に急用が入ってしまい、美術館を訪れる機会を逃すことになる。ライプツィヒに戻ってみると留守中に届いた郵便物のなかに小西からの書簡がある。主旨は次の通りであった。「最近瑞西で出版された『画集ペスタロッチャーと其時代』によると、二十余年の昔僕が神の御霊のやうに大事に大事に日本に携へ帰ったあの名画『スタンツのペスタロッチャー』の色刷が出来たらしい。さうしてその原画の所在もバアゼルの美術館と明記してある。自然バアゼルへの行脚の機会もあらば、この色刷の複写は是非買求めて送って欲しい。画家はグローブで画題は『スタンツのペスタロッチャー』である。萊府(ライプツィヒ)の書店か絵画店に頼んだり或ひは取り寄せて呉れるかもしれない。」¹⁴⁾

長田がバーゼル公立美術館を訪れる機会は同年12月にやってくる。午後9時バーゼルに到着。翌朝向かった場所には絵画の陳列会場移転の注意書きがある。こうして始まった一日を長田は次のように描いている。

……多少の不满にも拘わらず、私は所在の明瞭なのに勇氣を出して、前来た道を後戻りして、その美術堂へ急いだ。稍々神経の尖った私は、入口に複製品を売っている年増の女売子に念を押しした。「グローブの描いたスタンツのペスタロッチャーはこの美術堂にあるでせう」

「そんなものは此処には無い」

と冷かな答、私は驚き且つ怪しんだ。私は早くも「容易ならざる結果」の勃発を直覚した。萊府からはるばる瑞西のバアゼルまで、特別急行列車でやって来たのも、思へば一枚のこの画を見るのが目的である。私は決意した。如何なる犠牲を払っても、目的を達するまでは、ゆめこのバアゼルを退くまいと。

私は偶々傍に居合はせた美術館の老守衛を捕へてグローブの筆になるペスタロッチャーの名画の複写が全く不思議な因縁で、今から二十三年の昔遠い日本に渡来したといふこと、その複写が更らに複写されて、津々浦々まで行き渡り、今では日本の教育者にして其画に就て無知なるは一人もないということ、自分の観察にして若し誤なしとすればペスタロッチャーを畏敬し愛慕する情熱の強さにおいて、恐らく現代

の日本は世界の何所の国に対しても劣るものではないということ、さういふ日本の一人の教育者が、假令今は葉府に仮寓の身とは言へ、その一枚の絵画を見るべく、態々ここまでやって来たのであるといふことを、或は恨むやうに、或は訴えるやうに、或はまた哀を乞ふやうに物語った私の一片の丹心は老守衛の胸を打った。彼は言った。私は心の最善を尽くすであらうと。(『学園日記』第8号, 41~42頁)

長田は守衛に連れられて、美術館から「約三四丁」ほど離れたところにある分室の地下室へやってくる。そこは非展示絵画の「物置」であった。長田は叫ばずにはおれなかった。「あのペスタロッターの名画がこんな地獄に投げ込まれてあるのか。」守衛は、観念的であるため一般の者には興味がない絵であるから取り片付けられたのだと答える。「腹立たしくなった私は、一体瑞西の国民は祖国が産んだあの偉人を塵芥の中に投げ込むことほど左様に厚顔無恥なのかと、罪も無いさうして我が事のやうに私のために骨を折ってくれる守衛に当たった。守衛は黙々として部屋中を探す。私も鼻の穴まで黒くして埃の中を尋ね回る。」しかし、二人は見つけることができなかった。

二人は分室隣の事務室へ行った。守衛は「年増の女書記」と問題の絵画の所在について話をした後、長田を連れて第二の物置へ行く。しかし、絵は見つからない。「失望そのもの」の長田は守衛とともに事務室に戻った。そして、このまま絵を見ずに帰ることはできないから、美術館長でもパーゼル市長でも助力を請うので住所を教えてほしいと掛け合うのであった。長田の言葉に辟易したかのように「ではしばらく……」と言って書記と守衛は慌ただしく部屋を出て行く。残された長田はただ落胆して彼らを待つほかなかった。

しばらくして二人は吉報とともに戻って来る。絵は最初に探した地下室にあったのだ。いちばん奥の暗いところに裏面を向けて置いてあったため見つけることができなかったとのことである。地下室に再び入った長田の目の前に今や彼の名画がまざまざとある。「私は余りの嬉しさに黙祷した。さうしてこれがわが小西先生に依って日本に伝来したあの画かとつくづく眺めた。……今から五十年前のものとは思われないほどの光沢と新しさとがある。やる瀬なき愛の焰に燃えているペスタロッターの心は彼れの顔のみではなくて、四肢に五体に染み出ている。」長田は書記に、瑞西国民に興味がないのであれば日本に購入したいこと、そうでなければチューリッヒのペスタロッター記念館にこそ置かれるべきことを伝えた。書記はウィーンで作られた色刷複製を見せてくれた。これこそ長田が小西に

依頼されたものであった。彼は六枚ほど手に入れ、帰国の土産とすることが叶ったのである。

なお、この絵をめぐる長田の帰国後の活動が、鯨坂二夫の回想録のなかで触れられている。広島大学広報誌『学内通信』が1983年に長田の特集を組み、その巻頭記事に鯨坂の「ペスタロッター研究創草の頃」を取っている。鯨坂はそのなかで、長田による「シュタンツの孤児」の移入と伝播に関する講演会の様子を回想している。

そして初めて長田先生にお目にかかったのが、たしか昭和四年、私が京都大学の学生となった初夏だったと思う。恒例の教育研究会が楽友会館で催され、講師としてお迎えしたのが、ドイツから帰られたばかりの長田新先生であった。見るからに精力的なお顔立ちを忘れない。小西重直先生が、「小原君の甥だ」と言って紹介して下さった。

その時の長田先生のお話の中には、グローブの描いた「シュタンツのペスタロッター」の絵についてであった。この三色刷りの記念すべき絵——白黒のものは、すでに明治の頃に我が国にも入っていたらしい。——を、はじめて日本に持ち帰ったのが長田先生であった。小西先生からの、是非に、という再三の手紙をもらって、どうしても捜し出さなければと、苦心に苦心を重ねて、パーゼルの美術館を数回にわたって捜したが、どうしても見つからない。遂にその地下室に入れてもらい、埃に埋もれた古い絵を、一つ一つ、丹念にめくるように捜したところ、やっとこの絵が現れた。その時の喜びは言葉に表せない、長田先生は実感にあふれたあの名調子で話された。それにきき入る私たちも、また感じ入ったことであった。その聴衆の中には、後年、ともどもに京大の教壇に立った前田、篠原などの先輩たちの姿もあったが、みな同じ感慨であったに違いない。この絵は、後でアイデア書院から複製され、全国にひろがって、学校の職員室を飾ることになったのである。(『学内通信(特集 大学と人 長田新)』第15期第4号 (No.228), 1983年9月20日, 3頁)

一年余りのドイツ留学から戻り、わざわざ京都大学に招かれて行った帰国報告が「シュタンツの孤児」探索の逸話であった。「すでに明治の頃に我が国に入っていた」白黒版は小西が持ち帰り広めたものである。そして、今度は多色刷のウィーン版を長田が持ち帰ったのであった。鯨坂は、本人が触れているように、小原國芳の甥である。そして、長田のウィーン版をもとに多色刷を広めたアイデア書院の責任者こそ小原であっ

た。もっともこの時イデア書院はすでに玉川学園出版部と名称を変えていたのだけれども。

5. 玉川学園版複製画の製作・販売 (1930)

玉川学園の創設者である小原國芳は、編集者としても日本の教育界をリードしていった。彼はまず1923年にイデア書院を立ち上げ、1929年の玉川学園創設にもなってこれを玉川学園出版部と改称、さらに第二次世界大戦後の玉川大学発足とともに再度改称して、今日の玉川大学出版部とした。その間、多数の教育学関係書を出版し、雑誌の編集を手がけた。

小原は自ら編集する雑誌『学園日記』を中心に「シュタツの孤児」の販促活動を積極的に展開している。第7号(1930年2月)以降、小西と長田の紹介文を掲載し、自ら複製の意義を強調する文章をコラムや編集後記にたびたび書いている。また、読者の目に留まりやすい巻末に全面広告を何度も載せている¹⁵⁾。

たとえば、多色刷の「シュタツの孤児」を口絵として掲載した第7号には、小西の「ペスタロッチャーのスタンツ孤児教育絵画物語」に続けて、「複製販売のお知らせ」が掲載されており、その意義が次のように述べられている。

二月十七日はペスタロッチャー先生の記念日です。この日に、先生を偲ぶ最上のものとして、この「スタンツ」の名画に如くものはあるまいと思はれます。皆さんの講堂に、教室に、書齋に、この名画の掲げられますことは、たしかに日本教育の上に、崇高な靈感が与えられるものと信じます。かかる意味に於て、この原色版を広く天下に頒布し、一にはペスタロッチャー先生への好記念とし、一には我が教育界への奉仕ともいたしたうございます。(22頁)

販売促進のための宣伝文句であるとはいえ、「シュタツの孤児」がペスタロッチャー精神を体現した作品であり、これを頒布することが日本の教育界にとっていかに意義深いことであるのかが直截に述べられている。また、小原は『学園日記』の読者に次のような言葉で購入を勧めている。「どうぞ、お友だちや、生徒たちへもすすめて下さいませ。世界の聖者の一人の貴い戦を書齋に掲げて、その貴い戦をしのぶだけでも心が清められるではありませんか。」¹⁶⁾

第7号の「編輯室」には事の経緯を説明した文章が掲載されている。出版予告を兼ねて小西の『教育の本質観』を宣伝したあと、次のように続ける。

それに、喜んで頂きたいことは先生から、特別の要求によって、口絵には、ペスタロッチャー先生のスタンツの孤児院の三色版刷りが加へられることです。しかも、長田教授が、ドイツで手に入れられた全くステキなものそのまま、忠実に複製したのです。小西先生が狂喜するほど喜ばれた絵です。「若い先生方や師範生たちのために是非口絵として附けられたく願上候」と小西先生の手紙にはあるのです。

何れは、原色版で講堂用や職員室と書齋用との二種つくりませう。ゼヒ、お求め下さいますやうお願いいたします。(『学園日記』第7号、69頁)

『学園日記』第7号の口絵と同質のものであるかどうかは確認できていないが、小西に依頼され、『教育の本質観』の口絵にも「シュタツの孤児」の三色刷りが掲載されたようである。そして個別販売用として、大(講堂・教室用)、中(書齋用)、小(書齋用)の三つの異なるサイズの複製を作ることを企画している。なお、複写の質をより高いものにすることを理由として、企画から販売までの間に二度の価格改訂を発表している。最終的には大が4円、中が70銭、小が30銭で販売された。販売方法は注文毎の郵送によるのみで、店舗販売は行っていない。前金制、送料は出版部負担、購入枚数に応じた割引率を設定している。大中小それぞれの販売部数はわからないが、第15号(1930年10月)の全面広告によれば、「正に六千部を売尽す」とある。

翌1931年に小原は欧米視察旅行を行い、スイス(おそらくチューリッヒ)でこの絵の複製画と出会っている¹⁷⁾。小原は日本円に換算して25円であったと報告しているが、それがウィーン版であったかどうかは明記されていない。この旅行の回顧録が掲載されている



『学園日記』に掲載された広告

1939年の『全人』第8巻第2号の巻末にも複製の写真入り全面広告が掲載されており¹⁸⁾、複製が玉川学園出版部によって継続して販売されていたことが推測できる。現在も玉川学園小原記念館には、余白に「玉川大学出版部」と記された複製が保存されており、戦後の改称後も複製を世に送り出していたことがわかる。

6. 様々な「異本」、様々な伝播

「シュタンツの孤児」には、ウィーン版や玉川学園版だけでなく、様々な複製「異本」が存在し、様々な伝播を媒介してきた。たとえば、小西がチューリッヒで見かけ、ミュンヘンで購入したように、20世紀初頭にはすでに複製がヨーロッパ内に出回っていた。また、福島はウィーン版が製作される以前の1925年にペスタロッター関連の遺跡を巡歴し、ノイホーフで学校の教室に複製画が掲げられているのを見ている¹⁹⁾。

日本でも小西の持ち帰った複製画を元にこの絵は広く知られるようになり、多くの異なる複製が作られ頒布されたようである。先に引用した広島高等師範ペスタロッター会の複製は非売品であったが、他にモノクロ版の中サイズが70銭で販売されていたという指摘もある²⁰⁾、愛知県教育会発行の複製も存在する²¹⁾。また、頒布用であったかどうかは定かではないが、広島高等師範学校教育研究会編『学校教育』第152号（第13巻第2冊、1926年2月）の口絵には「『愛のペスタロッター』数々の思出」と称して十枚の写真が掲載されており、そのなかにはグループの「シュタンツの孤児」も含まれている²²⁾。ペスタロッター関連の著作・雑誌特集号においても表紙や挿絵にこの絵の複製がしばしば用いられている²³⁾。1950年の『小学校社会科学習指導法』の表紙にもこの絵が使われ、翌年の『小学校指導要領社会科編（試案）』の表紙にも再度使用されていることは特筆すべきことである²⁴⁾。当時『指導要領社会科

編』に対するいかなる期待からこの絵が採用されたのかは、興味深い問いであろう。

バーゼル公立美術館には今なお、雑誌の表紙からクリスマスカードのデザインまで、「シュタンツの孤児」の採用を希望する手紙が世界各地から届けられている。美術史上の価値とは別に、この絵は今日も広く認知され何かしらの願いを乗せて世に送り出されているのである。

おわりに —アイコンとしての「シュタンツの孤児」、あるいは、教育運動における視覚メディアの役割

キリスト教の布教にアイコンが用いられたように、「シュタンツの孤児」の複製画はペスタロッター精神を普及するために用いられた視覚メディアであったといえるだろう。

小原の求めに応じて、東京高等師範中主事の馬山孝太郎は次のような「ペスタロッターについての感想」を寄せている。「ペスタロッター先生の絵はがきは、何十年来私の卓上を飾ってあります。日夕景仰の意を捧げてゐる次第です。何か教育上の考え事をする時、この絵はがきを見詰めると、そこに解決を与へて貰へる様な気になり、理論めいたことを言ふ時、そこに示唆を受けるやうな気持ちになるのです。熱の人、意の人、愛の人の有難いところは其処だと思つてゐます。」²⁵⁾この絵はがきのモチーフが「シュタンツの孤児」であったかどうかはわからない。ただ、小西、長田、小原の言説が示しているように、とりわけグループの絵がペスタロッター精神を体現したものとして大きな影響力をもち、内外のペスタロッター運動の普及に大きく貢献したことは確かであろう。

ただ、このメディアが作製された各時期・各地の事情は異なる。推察の域は出ないものの、原画はスイスという国家を称揚する意味合いをもち、ウィーン版は政治的な背景とともに新教育ならびに社会改革の象徴として、また玉川学園版は神格化された理想像として教師の精神的拠り所となることが期待されたのである。

【謝辞】

調査に際し、次の方々に特にお世話になった。記してお礼申し上げる。ウィーン夜間ギムナジウム校長 Oskar Achs 氏。オーストリア市民大学資料館館長 Anton Szanya 氏。ウィーン労働運動資料館館長 Wolfgang Maderthaler 氏。J & V 社編集部 Bettina Gessinger 氏。グラーツ大学教授 Werner Lenz 氏、同大学図書館司書



バーゼル公立美術館所蔵の原画

Frank Koren-Wilhelmer 氏。バーゼル公立美術館学芸員 Hartwig Fischer, Gian Casper 各氏。玉川大学教育博物館学芸員白柳弘幸氏, 同大学講師佐藤隆之氏。チューリッヒ教育大学ペスタロッター教育史研究所秘書 Ruth Villiger 氏。広島大学教授片上宗二, 内田雅三, 菅村亮各氏, 同大学助教授三根和浪氏, 同大学助手小宮山道夫氏。

【注】

- 1) この絵はいくつかの類似した名称で呼ばれている。原画の額には Pestalozzi bei den Waisen von Stans とあり, これが正式名称といえるが, ウィーン版複製画の場合のように Pestalozzi in Stans と呼ばれることもある。またフランス語文献では Pestalozzi et le orphelins de Stans と紹介されている。この絵のほか、Heinrich Pestalozzi und die Waisenkinder in Stans (1870) という、孤児を抱いて戸口に立つペスタロッターを描いたアンカーの作品がある。このアンカーの絵のフランス語名がグローブのものと同様、Pestalozzi et le orphelins de Stans であり混同されやすい。日本語でも複数の呼び名が存在する。「ペスタロッターのスタンツ孤児教育絵画」(小西), 「スタンツのペスタロッター」(長田), 「スタンツ孤児院に於けるペスタロッターの肖像」(小原) 等、様々である。ここでは正式名称を「ペスタロッターとシュタンツの孤児」とし、適宜「シュタンツの孤児」と略す。
- 2) 広島大学教育学部教育哲学研究室編『広島大学ペスタロッター研究室所蔵ペスタロッター文献目録付解説』1976年, 31-33頁。解説は、『学園日記』第8号(1930年3月)と第15号(1930年10月)にそれぞれ掲載された長田新「グローブ筆『スタンツのペスタロッター』を訪ねて」および「グローヴ筆『スタンツのペスタロッター』に就て」からの引用と要約。
- 3) 岡谷英明「広島大学教育学部ペスタロッター資料室所蔵資料の調査研究」『広島大学研究・教育総合資料館研究報告』第1号, 1995年, 24-25頁。考察の対象はペスタロッター資料室が所蔵する史料に限られている。
- 4) 長田は「グローブ筆『スタンツのペスタロッター』を訪ねて」のなかで、1827年をグローブの誕生年と記しているが典拠は不明(『学園日記』第8号(1930年3月), 44頁, 『独逸だより』, 59頁)。グローブについては次の文献を参照。Nikolaus Meier, *Emilie Linder und Jacob Burckhardt: Stiften und Sammeln für die Öffentliche Kunstsammlung Basel*, Schwabe & Co.

AG, Basel/Muttenz, 1997. Mariuccia Spenger, “Grob, Konrad,” Schweizerisches Institut für Kunstwissenschaft Zürich und Lausanne (hrsg.), *Biografisches Lexikon der Schweizer Kunst unter Einschluss des Fürstentums Liechtenstein*, Verlag Neue Zürcher Zeitung, 1998. Franz Zelger, *Heldenstreit und Heldentod: Schweizerische Historienmalerei in 19. Jahrhundert*, Atlantis Verlag Zürich und Freiburg im Breisgau, 1973.

- 5) 購入年と資金については, Meier, S. 134. また, ビルマン基金については, Meier, Ss. 64-65.
- 6) Theodor Curti, *Geschichte der Schweiz im XIX. Jahrhundert*, Verlag von F. Zahn, S. 250 (出版年不詳).
- 7) この紹介文は『教育の本質観』にも附録として再録されている。
- 8) 以下の引用箇所は「ペスタロッターのスタンツ孤児教育絵画物語」からのものである。
- 9) 福島政雄『ペスタロッター遺跡巡礼』イデア書院, 1926年, 132頁。「遺跡歴記」として『ペスタロッター』(福村出版, 1976年)に再録されているが, 言葉遣いに若干の相違がある。
- 10) とりわけ, J & V 社発行の *Die Quelle* に多くの関連記事が載っている。
- 11) ウィーン新教育運動の評価については, 丸山恭司「オーストリア学校改革期のウイトゲンシュタイン」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第39巻第1部, 1993年。また次のものを参照。手塚甫「オットー・グレッケル——オーストリアにおける教育改革の試み」, 朝日ジャーナル編集部『光芒の1920年代』朝日新聞社, 1983年。田口晃「赤いウィーンと精神分析」, 長谷川晃編『市民的秩序のゆくえ』北海道大学図書刊行会, 1999年。須藤博忠『オーストリアの歴史と社会民主主義』信山社, 1995年。
- 12) 『学園日記』第8号(1930年3月), 45頁(『独逸だより』, 61頁に再録)。
- 13) 以下は, 長田「グローブ筆『スタンツのペスタロッター』を訪ねて」を参照した。引用箇所は『学園日記』第8号からのものである(『独逸だより』とは若干の違いがある)。
- 14) 『学園日記』第8号, 38頁。
- 15) 巻末全面広告は小原が自ら編集に係わった雑誌, 成城学園編『教育問題研究』にも三度掲載されている(第44・45・46号(1930年3・4・5月))。
- 16) 『学園日記』第8号, 47頁。
- 17) 小原國芳「遺跡巡りの思ひ出」『全人』第8巻第2号(1939年2月), 59頁。
- 18) ただし, 講堂用大版は値段据え置きであるがサイズが大きくなっているし, 書齋用の中小版は値段が

グローブ画「ペスタロッチャーとシュタンツの孤児」の複製と伝播について
—あるいは、教育運動における視覚メディアの役割—

安くなりサイズが多少大きくなっている。また、送料は自己負担に変更されている。

19) 福島, 48頁。

20) 『学園日記』第8号, 46頁。

21) 中野光「日本の教師とペスタロッチャー(Ⅱ)」『人間教育の探究』第14号, 2001年, 7頁。

22) 広島市公文書館は、この十枚のほかにもペスタロッチャー関連の絵はがきを所蔵している。そのなかには、イデア書院が作成した「スタンツの孤児」も含まれている。

23) たとえば、「ペスタロッチャー記念号」として編まれた『教育時報』第5号(大阪府教育会, 1927年2月)の口絵には、田中篤朝による「シュタンツの孤児」の模写が載せられている。また、池田宣政『偉人ペ

スタロッチャー』(大日本雄弁会講談社, 1941年)には明らかに「シュタンツの孤児」をモチーフとした梁川剛一の絵が口絵となっている。最近のものでは、次の文献・雑誌の表紙にこの絵が使われている。山崎高哉編『応答する教育哲学』ナカニシヤ出版, 2003年。尚志会誌第7号2003年, 第8号2004年。

24) 文部省『小学校社会科学習指導法』中等学校教科書株式会社, 1950年。文部省『小学校学習指導要領社会科編(試案)』日本書籍株式会社, 1951年。中野は後者について語るなかで、表紙の提案は文部省初等中等教育局で上田薫とともに指導要領の編纂にあたった長坂端午の提案によるものとしている(中野, 12頁)。

25) 『全人』第8巻第2号, 11頁。